

生活空間の分散と都市の想像力

——介護課題への取組事例から——

西野 淑美

都市の定義の揺らぎが指摘されているが、本稿はあえて都市という語をとりあげ、この語が我々の生活の空間性の可視化と、人間関係の質・量を空間的距離と関連させないような志向の言語化につながる可能性を探る。親と子供たちの居住地が分散した状態のままで、親の在宅介護を試みた3家族の事例の考察を通して、空間的距離から自由な生活への志向の存在を指摘すると同時に、状況の空間性が当事者によって言語化されにくいことと、都市の語られにくさとのつながりを考察する。

1. 都市という語の位置づけ

現在、ある事象を都市という視点から扱うことの妥当性を示すことは、複雑になってきている。

社会学における研究対象としての都市がどのように成立するのかについては、すでに1960年代から、都市と農村という対立項を自明視できないという認識が強まり、議論が起こっていた。その時期の迷いは、例えば以下のような言明に率直に現れている。「(昭和四十年前後)以降において、社会学者は意識的にせよ無意識的にせよ都市のイメージの転換を余儀なくされてきたといってよい。その転換は帰納的であれ演繹的であれ『農村』と区別された『都市』をもはや認めえないところから起った。(中略)そこでもとめられたものは『新しい都市』のイメージにはかならず、今日の『都市社会学の課題』も究極的にはここに設定されねばならなくなった

のである」(高橋 [1975:87])。

そこが地理的に都市だから、そこで起きていることは都市という観点から扱う意味がある、とは簡単に位置付けられなくなった。だが、だからと言って都市という視点が放棄されたわけではない。高橋勇悦は上記の引用箇所続けてこう述べている。「『新しい都市』のイメージの追求は『都市社会学』の存続の意義に関わっている。たとえば、『地域社会』論との関係で考えてみればよい。都市が崩壊し農村が崩壊したと認識されるようになって以来、さまざまな意味における『地域社会』論が登場するようになった。もし地域社会論(ひいては地域社会学)が都市社会学を吸収し、農村社会学を吸収する(?)と考えられるなら、あえて『都市社会学』の存続をはかる必要はないであろう。」(高橋 [1975:87])

それでもやはり都市としてしか言い表せない何かがあるのだ、という感覚を、少なくとも都市社会学を志向した研究者達は、その後も持ち

続けてきたと考えられる。

都市⁽¹⁾は、空間そのものであると考えられやすいが、概念というものがおそらく原理的には皆そうであるように、実体が無前提に先行しているのではなく、そういう空間があると想定したときのみ立ち現れる、という意味で想像的な存在・概念的な存在と考えることは可能だろう（西野 [2000]）。都市域という空間と都市という存在の想定が、疑問を挟んでも意味が無いほど自然に重なっていたときは、自明に存在していると考えられている当該の実体（つまり都市域という空間）で起きていることの中身を問えばよかった。しかし、都市域と概念的な存在としての都市との一致が信じられなくなったとき、都市域の中身を問うことに専念してきた視点——この場合は都市社会学——は、アイデンティティの揺らぎに直面した。そこが都市域であることは都市域で起きている事象を都市という視点で扱う理由にはならなくなった。

それでも、今日も都市は語られる。ただし、以前のように共通理解があるわけではない。日常生活で用いられる都市という語のニュアンスと、研究上都市の要素として取り上げられるものは必ずしも一致しないし、分野や研究毎にも違う。そして、どの都市概念が正しい、というようなものではない。だから、研究者は常に自分が上記引用の『『新しい都市』のイメージの追求』を行っていることを自覚しなければならず、今何らかの事象をあえて「都市としてしか言い表せない何か」を含むものとして研究者が位置づけるとしたら、その根拠は究極的には、研究者個人の都市イメージに遡るしかないだろう。

だが、根拠が個人にあることとは別に、何かを都市的と位置づけて分析することの意義は存在する。最も単純には、それを都市と呼ぶこ

とで、我々の日常に関する新しい視点を獲得できるならば、都市的と位置づける意味はあると考える。

そこで本稿では、都市を、人間関係の質・量を空間的距離と関連させない、いわば空間的距離から自由であるような志向に基づく生活様式と位置づけて——これを〈都市〉と表記する——いきたい⁽²⁾。そのことを通じて、空間的に分散した生活が現在いかに自明かつ選好されるものになっているかを示すと同時に、空間的に分散した生活様式の浸透が、断片的にしか当事者には自覚されない様子を描く⁽³⁾。日常における空間性見えなさは、都市の語られにくさと関係するよう見えるが、〈都市〉という視角を改めて提示することで、この表現に我々の日常生活の「空間性」の可視化・言語化を媒介させることを試みたい。

具体的には、在宅介護経験を経て親が特別養護老人ホームに入所するまでの3組の親子の過程を事例としてとりあげ、〈都市〉という視点で接近する。要介護状態は、空間的距離からの自由が拘束に変わる場面と言え、普段は自明な空間性が見えてくる場面と考えられるからである。事例で当事者が「家族」という視点から語っていることが、親兄弟や友人と近接して住むことにこだわらずに生活設計をすることの浸透——それは必要があるときは電話をしたり交通手段を利用して出かけていけば済む状況ということである——に実は多く起因している。親密な他者との空間的近接性から解放された生活が可能であることは、都市社会学のネットワーク論の知見からは都市規模の効果と位置づけられてきた。だが、学問的議論を離れた当事者の主観には、自身の状況の〈都市〉性は必ずしも意識されていない。また、当事者からは都市という言葉自体が聞かれにくい。

しかし、当事者の意識の中に不在であることは問題の不在を意味しない。むしろ、発話されにくく、意識もされにくいからこそ、自明性を獲得し、状況を硬直化させている可能性がある。よって本稿は、〈都市〉という視点の提起に加えて、都市の語られなさを解かれるべき問題として取り上げる。「都市の不在」が空間性の認識を妨げていることによって、自身の生活の〈都市〉性に我々の目が向かず、家族の範囲を越えて状況を語る言葉を我々が持たないような事態が生じている可能性をも議論していく。そして最後にもう一度、なぜ筆者が本稿の事例を都市という語を用いて位置づけたのか、筆者個人の中に見出されるだろう根拠を自省してみたい。

2. 先行するアプローチとの異同

本稿の分析は、都市と農村という二項図式の中ではうまく切り取れない社会になってきたとの自覚がなされた後に都市社会学の中で見られた二つのアプローチに多くを負う。

第一に、都市生活のエッセンスを同定して、それが都市域外に広がっていく様子を同定するという方向があった。例えば、「専門家・専門機関による共通・共同問題の専門的な共同処理」という、都市域という地理的なものは独自に成立する「都市的生活様式」の定義(倉沢[1977])を活用して、「都市化の社会学」の解明をめざす、という方向である。都市的生活様式の浸透は、親族や友人の対面的な手助けに依存せず、日常の食料調達から病院まで専門処理サービス⁽⁴⁾に依存できる、という生活の社会化が、家族の分散的居住を支えているという点で、事例の状況の背景をなす。

第二は、都市的生活様式とは別に、人口集積

の独自の効果を示す方向があった。その一つとして、アーバニズムの下位文化理論/パーソナルネットワーク研究が挙げられよう。そこから得られる知見は、本稿の事例の家族が置かれている状況に対して説明力を持つ。Fischerは様々な調査を渉猟し、また自身の調査データも用いて、大都市ほど親族・友人などの親密な人間関係が疎外されるというそれまでの通説に反して、「都市の人々は小さな町の人々に比べて、友人関係が少ないとは言えず、親密さも劣らない」(Fischer [1984=1996:198])「アーバニズムの効果は核家族の絆の親密さと深さを損なうものではないようだ」(Fischer [1984=1996:207])と結論づけた。また松本康は、山形市と朝霞市を比較した調査の分析で、山形市では親族・友人とも家から30分以内に住む人にネットワークが集中しているのに対し、東京近郊の朝霞市では親族・友人ともより広域(特に家から1-2時間が増える)に広がっていることを報告している(松本[1995:58-79])。つまり、都市規模によって見られる違いは、関係の絶対量ではなく、関係を結ぶ相手の居住地の空間的な分散の度合だという知見である。親密な絆が空間的に分散している大都市の生活の特徴を、Wellmanはコミュニティ解放と呼んだが(Wellman [1979])、大都市圏は空間的規模が大きい上に、移動手段や通信手段の発達によって、居住地が離れた友人や親族ともつきあいを保つことが充分可能であること、逆に言えば高い自由度の中で居住地選択することにためらいが伴わないことに、名称を与えたと言えよう。生活課題の専門処理依存としての「都市的生活様式」は市部・郡部を問わずに浸透していったとしても、都市規模がもたらす効果はこのような形で独自に示せることを明らかにしたとも言える。都市域で生活している人々が家族資源を調達する際の前提には、この

ような環境がある。

家族の居住地の分散という事実だけでも、事例で紹介していく状況を構成する重要な要因ではある。ただ、この分散という事態が自明の条件になっていること自体に、もう一段要因が見出せるので、本稿では居住地の空間的分散という生活構造だけでなく、あえてそのことが主観的にどう映るかを問題にする。

そこには面倒な問題がある。都市社会学が都市的だと位置づける特徴を、当事者が「都市」という言葉で語るとは限らないということである。後述するが、「都市」という語はむしろ人間関係の質・量が空間的距離から自由であるようなコミュニティ解放的な生活を喚起する力を持たないかのごとく見える。本稿では、意識にのほりにくいことが、かえって空間性の自明性を強化しているのではないかという観点から、当事者の見えかたを分析していく。

3. 事例

東京都目黒区内のとある特別養護老人ホームの入所者の子供への聞き取り調査⁽⁵⁾から、3組の親子の、事例を挙げていく。いずれも、親子が空間的に分散してそれぞれの生活を成立させてきた中で、親が要介護状態になったとき、一人の子供が同居して全面的に責任を持つこととは違う方法を取った例である。

3-1. Aさん (男性・44才)

Aさんの母(76才)は、32才で夫に先立たれて以来、品川区の自宅を学生向けアパートに改築して収入を得つつ、内職やパートをして、Aさんとその姉(49才)を一人で育ててきた。Aさんは成人して家を出て、仕事の関係で首都圏近郊を転々としたが、姉夫婦はアパートの2階

の一部に住み、母は1階に住み続けた。母は1993年頃(68才頃)痴呆の症状が出始めた。だんだんとスケジュールを忘れるようになり、お金の管理が出来なくなっていった。その頃Aさんは千葉県の八千代市の社宅に住み、職場も千葉県内だったため、週1回程度様子を見に来るのが精一杯だったという。

姉は1995年初めに家を買って、引っ越してってしまった。Aさんから見ると、姉は匙を投げたということになる。母は一人暮らしになってしまった。毎日2時間ヘルパーが来てくれたが、Aさんは週1回くらいしか通えない。ヘルパーが記入してくれる記録ノートが頼りだったという。仕事をやめることも考えたが、比較的職場に理解があったので思いとどまった。

妻があまりに大変だと言ったことと、母も独りで住み続けたがったため、同居という選択をせず、結局息子が通って生活管理を手伝いつつ、ホームへの入居待ちを続けたと語る。ホームも、母が住み慣れた地域の近くに申し込んだ。姉は早く入れるなら千葉でもいいのではと言ったが、環境を変えないであげたい、とAさんは強く思っていたし、またAさん自身、自分が育ったその地域に愛着が強かったと述べる。それもあって、母が1995年9月にホームに入所した後も、母がいつか帰ってこられるようにと、アパートの借地権の延長を決め、老朽化した建物を建て直したという。Aさんは母の入所以来、月1回必ず休みを取って、八千代市から約2時間かけて母を訪ねて来ている。

3-2. Bさん (女性・58才)

Bさんの夫の母(82才)は、長年大阪市内で暮したあと、1994年から奈良県で夫婦二人暮らしをしていた。義父の方はその後要介護状態になった。Bさんの夫は4人兄弟の長男で、Bさ

ん夫婦は目黒区、次男夫婦は奈良県、三男夫婦は滋賀県、四男夫婦は大阪府に住んでいる。義父と義母は1997年に三男夫婦と同居を始めたが、約一年後に義母は三男宅を飛び出し奈良の自分の妹宅に身を寄せる（義父は入院、1999年に死去）。親族話し合いの結果、そんなに自由に暮らしたいのなら一人暮らしをしてみたら、という話になり、義母は奈良で一人暮らしを始めるが、痴呆症状が出始め、金銭管理ができないなどトラブルが増えたため、1年後の1999年6月から、長男・三男・四男宅（次男は義父の面倒を見てきたということで免除）に3か月交代で同居する、という体制を、長男宅近くのホームに入所する2001年9月まで続けた。義母の気性の激しさもあり、ずっと同居するのはあまりに大変、という認識が子供たちにはあったと語る。義母は初めての土地でもデイケアや公民館の民謡クラブなどに通う社交性を発揮していたが、家を飛び出して搜索騒ぎになったりもした。また、3か月毎の移動は車で行ない、中間地点の名古屋あたりで弟と待ち合わせるという方法を取っていたという。

3-3. Cさん（男性・64才）

Cさん一家は、終戦後まもなく、岐阜県郡上八幡から東京に引っ越してきた。妹が3人いて、長女は結婚して横浜市で専業主婦、三女は結婚して仕事も持っており府中市に住んでいる。次女が独身で、そのまま母と目黒区で同居を続けつつ仕事をしていた。Cさん自身は1974年の転勤以来、青森県弘前市に住んでいる。母は2000年1月に脳梗塞で倒れ、7月に退院したが、要介護度が一番高い5の状態だった。それから2001年10月の入所まで、定年を迎えたばかりのCさんは、月20日間東京に来て母を在宅で介護した。介護保険で利用できるサービスは最大限

利用したが、家に誰かがいてヘルパーなどを迎え、家の者が全体を把握しているようにしたかったという。誰も知り合いのいないところに呼ぶのは可哀想だし、妹達は皆首都圏にいるわけだから、母を弘前につれていくことは考えなかったと語る。長女・三女には家族がいるし、次女も仕事があるから、定年になっていたCさんが青森から通う、という役割配分になったという。Cさんは、現在は再就職したが、ホームの家族会が開催される週末にかけて、今も月1回5日間東京に母を訪ねて来ている。

4. 事例と都市の関係

これらの事例は、都市的生活様式の知見と、パーソナルネットワークの特徴としての家族の居住地の分散とから説明を試みることができる。ただ、本当の息苦しさは、その状況が当事者には自分達親子及び兄弟姉妹以外の広がりを持って見えていないことにあるように思う。どの家族も、子供が責任を持って親の生活をアレンジするべきであるという感覚が強い。しかし、そうになっていることの背後には、空間的距離から自由な生活の自明化、もっと言えば選好がある。だからこそ、彼らは長距離移動という大きな負担を払ったのである。それは〈都市〉の問題として取り上げることで見えやすくなると考える。

4-1. パーソナルネットワーク論・都市的生活様式論からの描写

親子そして兄弟姉妹が空間的に分散して生活しているという条件下で、家族内で状況を解決するにはどうするか、というのが、事例の3家族が抱え込んだ問題だった。

介護における外部サービスの利用は、専門処

理への依存という都市的生活様式の深化という面から都市社会学の 이슈として位置づける。都市社会学の分野で高齢者のパーソナルネットワークや地域福祉などが取り上げられる際、都市域の高齢者を扱うことも都市社会学の一つである、という以上に「高齢者福祉はなぜ都市社会学の扱うべき 이슈なのか」と改めて問われることは、管見では多くない。その中で金子勇は、自覚的にこの問題を提示している。金子 [1997] の論旨は、鈴木栄太郎が説いたように「正常人口の正常生活」(鈴木 [1957]) の構造を明らかにすることが都市社会学の役割ならば、人口の15%を占める高齢者を取り上げることも、また集合的消費の要素として浸透してきている社会福祉を取り上げることも違和感はない、むしろ、生活課題の解決を専門機関による処理に依存する「都市的生活様式」(倉沢 [1977]) が市部・郡部問わずに日本全体に広がっているとすれば、福祉サービスという専門処理の利用形態について説明できる言葉を都市社会学は持つべきだ、というものである。そして、専門機関サービス受容の家族による取捨選択の過程を考慮に入れていないため、都市的生活様式論の説明力は低くなってしまっているとも指摘する。

本稿の事例を通して分かるように、専門処理へ依存した生活の弱点は、受け手の側に、必要なサービスを選択し、利用を決定して管理する能力がなければ成立しないことである。その役割を親が自分で果たせなくなった状況が要介護の状態と言えるが、親に代わってサービスの選択とアレンジをするのは子供の役割との考え方を、事例の3名は強く持っていた。

平時は、基本的な生活課題は自分で専門処理サービスを利用して解決し、接点は電話で話したり、物を郵送したり、お互いが移動して会っ

たり、ということで保つことが可能である。しかし、親が一人では店や病院といった専門処理サービスを利用できなくなり、加えて介護サービスを利用する必要が出てきたときには、誰かが物理的にその人の側にいて、代わりに専門処理サービスの選択・管理をしなければならなくなる。つまり、空間的な距離を、電話や郵便ではなく、物理的に移動して埋めなければならない。

Fischerは、近所づきあいは、移動が困難な子供・小さな子供のいる主婦・高齢者・病人など地域を越えた相互作用を維持するのが困難な人が、選択肢の欠如の中、次善の策として行なうものようであると事例を挙げて指摘しているが (Fischer [1984=1996:167-168])、移動弱者は、「近接性からの自由」としてのコミュニティ解放を基本とした生活を維持できないことを示していよう。

専門処理サービスを利用し、空間的距離から自由な生活は、普段あまりにも自明になっている。そのため、介護問題のような一見関係の薄そうな領域がかえって、サービス選択能力と移動能力が下がってくる状況がいかにそれまでの生活の成立前提を崩すかを示すことで、我々の日常が依って立っている前提を明るみに出してくれる。

しかし、当事者には、自分達の状況が、社会に広く見られる生活様式及び空間的距離からの自由への志向に規定されているという感覚は必ずしも見られない。また、自分達の状況を都市という言葉を用いて語るわけでもない。研究者が都市の定義に苦心してきたのとは独立に強く流布してきた「都市」という言葉の作用を含めて、都市の語られなさが空間性の言語化を妨げる中、一層〈都市〉の自明性が強化される状況を次項で考察したい。

4-2. 当事者からの見え方

空間的距離からの自由の維持が崩れた状況として、この事例を筆者を含めた観察者が〈都市〉問題として位置づけることは、事態を分かりやすくすると考える。だがそれは、当事者が都市という語を用いていると言うことではない。むしろ、都市や近隣への想像力は回避されており、空間性に起因するような状況は言語化されない。

しかし、都市、あるいは空間性への想像力がふさがれていることこそが、〈都市〉にまつわる問題状況だと言えるのではないか。いわば、都市の語られなさによって、空間が意識されない、このこと自体が〈都市〉の特徴と言える。だから、一旦条件が崩れたときにも、人々には自分の状況を空間的分散に基づく生活様式に関連付けて語る術が用意されていない。以下では、この事例における都市や空間性の語られなさを見ていきたい。

4-2-1. クリーシェ化

事例の人々が都市という発想に縁遠いことには、「都市」という言葉が一定の形で言い古されてクリーシェ化しており——クリーシェ化した発想としての都市をカッコつきの「都市」と表記していく——、そこで帯びている意味が彼らにとってリアリティがないという可能性が一つ考えられる。

まず、「都市」がどのようにクリーシェ化していると考えうるか述べてみたい。「都市」を語る際には、接点の少なさ、ひいては人間関係の薄さといった意味が込められることが目立つ。それらが論理的には必ずしも都市域であることが原因とは限らなくても、「都会」⁽⁶⁾に関係づけて語られる。「都会生活はストレスの連

続」「都会ずれ」「このごろの都会の人の冷たさ」「加減が難しい都会での親切」「一人暮らしで心細い都会」「人付き合いの煩わしくない都会」⁽⁷⁾。どれもよく見る表現だが、考えてみればこれらのどの感覚も都会であることを成立の必要条件としていない。にもかかわらず、これらの表現は、このように文脈から切り離して羅列しても、都会という言葉と共に語られることが不自然ではないと感じられる。自然過ぎて、立ち止まって相対化して考えなくても、比較的気軽に使ってしまう。

接点の少なさ・人間関係の薄さと都市をつなげることがなぜか妥当性を獲得していることは、クリーシェ化という作用から理解できるだろう。社会生活の中でクリーシェが果たす機能について考察したザイデルフェルトは、クリーシェを以下のように定義している。「クリーシェとは、社会生活のなかで繰り返し用いられることによって、それがもともともっていたしばしば巧妙で索出的な能力を失っている、(言葉、思惟、感情、身振り、行為による)人間の伝統的な表現形式のことである。それゆえにクリーシェは、社会的相互行為やコミュニケーションに積極的に意味を与えることはできない。だがそれは、社会的にはたしかに機能している。クリーシェは意味への反省をまねがれている一方で、行動(認知、感情、意志、行為)に刺激を与えることはできるからである。」(Zijderveld [1979=1986:21-22])。

例えば、「都会の人の冷たさ」という表現は、都市に住む人全員が冷たいと思っていなくても、その表現と共に伝えられた話を特定の観点から理解させる機能を持つだろう。その意味で、この表現は「認知的反省をまねがれているために、相対化される可能性を排除しながら人々の意識の中にそっと侵入して、態度のレベルで

行動にうまく影響を与えることができる」(Zijderveld [1979=1986:28]) クリーシェ的な性質を持っていると言えよう。

しかし、なぜこのようなクリーシェが定着したのか。引用部分にもあるように、クリーシェは、元は索出的機能を持っていた表現が反復の結果言い古されるという過程を経て成立する。都市についても、こうした語りが新鮮に何かを言い当てていた時期があったはずである。例えば初期の社会学が、一九世紀のバスと鉄道と市電の大都市での発達以前にはありえなかった「数分間から数時間もたがいに語りあうこともなく、たがいに眺めあうことができたり、あるいはそうしなければならないといった状態」(Simmel [1908=1994:下252]) に純粹に驚いたり、その主体は大都市そのものであるとされるゲゼルシャフトを概念化した(Tönnies [1887=1957]) ことが思い起こされる。

都市域の人間が結ぶ関係性は、その後も都市社会学の中心テーマだった。しかし、基本的には疎外論的な論調が強かった。例えば、1960年代までの日本の都市社会学では、都市が一定の人格を住人に強要するとの視点が強かった。初期の整理の一つである、安田三郎の「都市社会と都会人」は、都市社会の特徴として、「人をその外見によって評価する」「機能の分化がいちじるしい」「人間関係が合理的かつ功利的である」「共同体意識に乏しい」「開放的である」「流動がはげしい」「組織的集団が発達する」「無統制である」の8つをあげ、これらの特徴から、次のような都会人の人間類型を推察できるとする。「(一) 都会人は考え方が合理的で、進歩的である。(二) しかし、他方において、功利的であり、冷酷薄情である。(三) 都会人は伝統にとらわれず、寛容的精神に富む。(四) 都会人は個人主義的である。(五) 都会人は虚

栄心がつよい」(安田 [1954:109-110])。今から見ると強烈な断定であるが、こうした人間類型が実証しうると考えられていたことは、当時は「都会の人の冷たさ」はクリーシェ化以前の意味論的な段階にあったことがうかがわれる。

クリーシェが「言語上の化石」(Zijderveld [1979=1986:34]) ならば、都市社会学も含めて当時は意味論的だった都市の語られ方が反復され蓄積されることが一つの要因となって、今となっては必ずしも自明でない「都会」という単位を、これも自明でない「冷たさ」とともに語ることの自然さが構成されていると考えられよう。都市社会学自体はアイデンティティが揺らいでも、それまで蓄積されてきた都市への接近の仕方の特徴は、我々の都市の想像力に影響していると考えられる。

実はコミュニティ解放的な生活と、クリーシェ化している「都市」という発想は、表裏一体である。このことは、Fischer自身が簡潔に述べている。「ワース⁽⁸⁾のテーゼでは都市における近隣社会の脆弱さは、一般的な都市のアノミーの一部である。しかし、よりよい説明は、アーバニズムはそこにいくらかの『近接性からの自由』をもたらすということかもしれない」(Fischer [1984=1996:175])。しかし、実際使用する際に、「都市」という語は近接性からの自由を喚起する力を発揮しているようには見えず、むしろ「都市」と発話することで〈都市〉の発想を阻んでいる可能性すら考えられる。

発言される文脈がパターン化して疎外論というマイナスのニュアンスに偏ってしまうことはまた、事例の当事者が「都市」を語りにくいことと関係する。そのことを次項で述べたい。

4-2-2. 「都市」を語らない大都市住民
「都市」が語られる文脈の偏りは、都市域の

住人が「都市」を語る事が少なくなることとつながると考えられる。大都市に住む人——自分たちを都市という存在に近いと感じていると想定できる——ほど、「接点の少なさ」「人間関係の薄さ」という形で語られる「都市」像に共感せず、よってクリーシェ化してしまっている「都市」を語らなくなる可能性がある。本稿の事例の当事者達も、同じ理由で「都市」を語らないと考えられる。

古沢照幸と加藤義明は、東京とそれ以外の3地域の小・中・高校生及びその親に対する調査で、「東京砂漠」「Enjoy東京」「先進都市」「きたない」「便利」「ビジネス都市」の東京イメージの因子構造を確認している（古沢・加藤[1989]）。

「東京砂漠」イメージ（負荷の高かった項目は「孤独な人が多い」「冷たい」「性が乱れている」「人間関係が乱れている」など）は東京外居住者に強く、東京居住者では大人のみ強くなっている。また、「東京に住んだことがある」「行ったことがない」より、「行ったことがある」人、つまり居住者ではなく訪問経験者に強い。

それに対して、「Enjoy東京」イメージ（負荷の高かった項目は「良い働き口が多い」「親しみやすい」「楽しい」「きれいな女性が多い」「自分の好きなことができる」「気楽な」など）はちょうど対称をなしている。東京居住者の得点が高く、東京外居住者の中でも東京居住経験のある人はこのイメージを持っている。

つまり、大都市に住む人は、ごく普通の生活の場としてしか都市を見ておらず、クリーシェ的な「都市」が含むような疎外的なイメージにあまり共感しないという結果になっている。

現在の都市生活者は、「東京砂漠」という語は知っていたとしても、それをもっともリアルな都市イメージとは捉えていない。クリーシェ

化された都会イメージの反証に日々出会い続ける大都市住民に対し、都会と地方の対立図式を保持しやすい地方在住者の方が都市をクリーシェ的な関係性で表現することを自然に感じるのには理解できる。だが、結果として、大都市に住む人への聞き取りなどから直接「都市」が口にされる場面を捉えることは難しくなる。あえて「東京の人間だと感じることはありますか」「都市を感じることはありますか」などとストレートに尋ねると、怪訝な顔をされて、「特にない」「生活が便利なこと」と言われる程度である。

人が「都市」を口にする場面を捉えれば、都市問題が浮かび上がる、というわけにはなかなかいかないことがわかる。しかし、ならば、大都市に住む人には都市問題は存在しないとしてしまっていていいとは思わない。語られなさによって、例えば空間性の規定力のように、見えなくなっているものがあるからである。

4-2-3. 「地域社会」という発想の縁遠さ

もう一つ、語られない空間性を挙げておこう。家族の処理能力を補完する存在として、近隣社会や隣人といったアクターに期待するという論理はありうる。例えば、地域の相互扶助やボランティアの力を活用する社会へというコミュニティ論的な議論は比較的目に付く⁽⁹⁾。都市的生活様式の浸透は家族の自家処理能力の低下と裏表であるが、施設入所などの専門処理サービスが不十分な中では、在宅介護での家族の処理能力の限界を地域社会で補う必要がある、という発想が背景に想定できる。都市的生活様式の要請するアレンジ能力や、コミュニティ解放的な状況もとの物理的な距離の問題が、都市社会学的な枠組から浮かび上がっているのだから、それを補う対策において物理的距離の近いアクターの利用を考えるのは自然ではある。

しかし、事例の当事者は、そのような意味での「都市への対処」を求めているようには見えなかった。地域社会は当事者の視野にはほとんどないようである。そもそもつきあいがなく、あったとしても介護における支援は期待できない、かえっていざこざが生じる、との見方である⁽¹⁰⁾。そもそも近隣関係が少ない人だけの発想ではない。近隣にネットワークがある人も、頼れるのは家族だけだとの意識が見られる。

「うちは町会にも長年関わってきたんですよ。でも、介護経験のあった人に忠告されたんです。近所の人を家に入れてはいけない、って。状況を分かってないで、あることないこと言われるから」(事例の3名以外のケース、フィールドノートより)という人もいた。

先ほどのAさんのケースも、近所に母への見守りの目はあった。店に買物にいったお金を払い忘れても、後日店主がそっとAさんに教えてくれたりしたという。母には近所の友人たちもいた。しかし、被害妄想の症状が強くなり、最初は心配して訪ねてきてくれていた友人たちとも関係が壊れてしまい、結局は近隣の人から見守り以上の支援を受けることは無かったという。

介護をめぐる問題は、近隣関係があったとしてもそれでもどうにもならない領域である、と当事者には見えているようである。介護の社会化や地域サポートは、家族の外側から、家族を通してしか機能しえないと思われているし、実際そのようにしか機能していない。外部サービスを利用するといっても、誰かがサービスの委託内容や介護を受ける親の状態を通して把握し、常にコーディネートしていなければならない、この負担の大きい役回りを子供たちの中で引き受けるために、Aさん、Cさんのように子供が長距離を通うか、Bさんのように親が移動した

のである。

家族の話はいくらでも出てくる。同居が難しい理由、均等に分担してくれない兄弟姉妹への不満、お互い自分の(生殖)家族の生活も維持しなければならないことなどである。むしろ、家族内の条件しか語られない。それに対して、近隣関係については、こちらが水を向けなければ発言されない。「近隣の支援が得られないのは、この辺では当然だと思いますよ」(事例の3名以外のケース、フィールドノートより)との発言もあった。それは、孤立無援の状況を「都会だから仕方がない」とあきらめて合理化しているのではなく、近隣の支援は最初から視野になく、支援してほしいと考えることもない、という意味のようである。「接点の少なさ」「人間関係の薄さ」という「都市」像と介護の負担とが結びついて意識されない中、それを補う地域社会という発想も外的なものとなる。

4-2-4. 「都市」と「家族」のつながり

当事者の中にも、「都市」と結びつけて状況を語った人がいた。Cさんは、小さい頃の岐阜での生活や現在の弘前での生活と比較して、東京での生活では「人と接することが少なかった」と振り返る。職場など小さな塊のつきあいばかりで、近所の人や家に上がった関係は生まれにくい、弘前では子供や祭りなどを介してそのような関係が生まれやすいのに、という。そして、東京のような生活が続くと、「接する」という人間の原点を忘れ、家族同士も絆が薄れ、子供が責任を持って親の面倒を見る、という感覚まで消えていってしまうのでは、と危惧する。

上のCさんの語りは、東京の外と比較する視点を持つCさんならではのし、またクリエティックに「都市」が語られて認知的反省を免れている面も否めないが、Cさんの中で「都市」

が「家族」につながる点に注目したい。コミュニティ論には、コミュニティ解放的な生活の弊害としての移動弱者の問題を、地域という資源でカバーするという発想が見られた。それに対し、Cさんは、移動弱者の問題はあくまで家族が責任を持ってカバーするものであるが、コミュニティ解放的な生活そのものがこの責任感を崩してしまうのでは、という危惧を持っている。この場合、コミュニティ解放的な生活は、二重にCさんにプレッシャーをかけているように見える。まず、分散した生活は維持するしかない所与の条件である。「母を動かしたくない」「妹達にも生活がある」「自分も弘前に定着している」というような発言からそう言えるだろう。しかし、加えて、そうした生活設計の空間的解放—Cさんのいうところの「接することの少ない都市生活」—は同時に、家族がセーフティ・ネットである、という認識自体を崩してしまうかもしれないものとして映っている。だからこそ、Cさんは「都市」に抗して家族責任の大切さを強調し、自分の実践で示し続けなければならなかったのである。そこでは「都市」は、空間的自由に基づく生活の自明性への気付きにはつながっておらず、むしろ〈都市〉への自覚を妨げる方向で作用していると言えよう。

4-3. 発話されない空間性

ここまで、当事者にとって、家族介護体制を維持することの困難さは、親子の居住地が分散しているという環境に遡ったり「都市」の冷たさにつなげたりして語られる事態ではなく、また地域に期待する問題でもなく、とにかく家族が頑張るしかない問題に見えているということを描いてきた⁽¹¹⁾。

しかし、むしろ難しさは、それぞれの子供が空間的に分散した生活を確立させていて、それ

が容易には変えられない、あるいは変えさせるべきではない、という感覚を持つことにあるのではないか。その感覚が所与の条件だからこそ、大幅な移動を親か子がすることに解を求めることになる。コミュニティ解放的な生活は、ニュートラルな事実という以上に、現実社会では、維持すべき優先順位の高さを獲得していると考えられる。

空間的分散の維持について当事者が語る場面は無いわけではないのだが、なぜか歯切れが悪い。3人とも、自分及びそれぞれの兄弟にそれぞれの生活があることを語っており、AさんとCさんは親の環境を変えないであげたい、と語る。距離は仕方がないものであり、それをいかに乗り越えたかというストーリーにはなっていない。ただそれは例えば同居という選択肢の難しさの言い訳を伴っていたり、「結果として施設にお世話になっていることを心苦しく思っている」(Cさんの発言、フィールドノートより)と述べたりする。

だが、我々の生活は専門処理の利用能力と移動・通信能力を前提に生殖家族単位で組み立てられてきているのであり、その前提を親が維持できなくなってもできるだけ元の枠組を替えない方法を模索するのは言い訳するようなことだろうか。むしろ、空間的距離の維持の必要の所与性が言語化されていないことの方が、息苦しい。

また、自身の〈都市〉性をさしおいたまま、「住み慣れた空間」や「知り合いがいる空間」の親にとっての価値をAさんやCさんに語らせてしまうような規範的な力の存在が事例からは窺われるが、これは空間的距離が近いことと人間関係の質・量の向上を結びつける点で〈都市〉とは逆方向を向いており、むしろ「都市」の想像力に近い。

現状の空間的分散の維持を志向しているにもかかわらず、当事者は〈都市〉を認知する言葉を持たず、むしろ近接性に価値を見出す思考との関係で語らざるをえなくなっていると言えよう。

当事者の見方をまとめてみたい。そこには二つの方向性がある。一つは、生殖家族単位で空間的分散を維持する志向である。もう一つは、親が専門処理を利用した空間解放的な生活を維持できないときは、子供がその能力を補わなければいけないという感覚である。これは、在宅で過ごす場合、現状では他にこの判断能力を補う役割を担える者が実質的にいないということであり、子供が責任を感じることは偶有的ではある。しかし、現時点では、事例のように、生殖家族単位に空間的に分散した生活の維持を重視しつつ、親子の責任意識も満たしたいというジレンマがあり、両立のためには大きな負担がかかる。

4-1でみたように、親が要介護状態になるということは、これまで拘束力をもっていなかった空間的距離が、突如埋めなければならない存在として力をもつ事態である。それは、都市社会学の蓄積から見れば、都市的生活様式やコミュニティ解放といった生活のあり方が裏目に出る場面といえ、その意味では都市という発想のすぐ隣にある。

しかし4-2でみたように、当事者の中では自分達の状況は「都市」と〈都市〉のいずれとも結びつけて捉えられていない。自分達の生活様式の帯びている空間的前提は言語化されていない。「都市」という表現は、クリーシェ化によって、この語が持っているはずの空間性への想像力を弱められており、またそれに代わって生活が人間関係の質・量の空間からの自由への志向に基づいていることを言語化するような語彙

もない。

だが、逆に言えば、こうした強力な自明化こそが、「空間性」の特徴なのではないだろうか。発話されないことで、一層その規定力は自覚されなくなる。「都市」も〈都市〉も当事者の意識に場を占めることができていない中で、彼らの言葉は「家族」以上の広がりをもつことなく、空間性の維持の負担は、社会ではなく家族の事情へと回収される。

だからこそ、空間的距離からの自由を志向することを〈都市〉的と呼んで、都市にクリーシェとは別の意味を注入していくことには意味があると考えた。事例を通して、空間的に分散した生活を語る言葉がなく、そのために自明性が強化されている可能性を示したが、言葉が無いなら言葉をさがす必要があるだろう。そこで、人間関係の質・量を空間的距離と関連させない、空間的距離からの自由への志向性を表現するのに適した言葉として、もう一度〈都市〉という言葉のもつ可能性に期待したのである。

5. 空間性を取り上げていくために

「都市」と〈都市〉の共通項は、それがどこかで空間に関する発想を持っていることである。第1節で、都市はそういう空間があると想定したときのみ立ち現れるという意味で、想像的な存在ではないかと述べたが、空間が何らかの影響力を持つと想像するときに都市という言葉が出てくるのではないか。だからこそ、筆者は本稿の事例を、例えば私化と呼んだりするのではなく、〈都市〉的と呼びたいと考えた。空間性に拘束される事態を通して、逆に近接性からの自由に基づいて各々の生活が営まれてきていたことが見えるからである。

しかし、空間性に注目するときは、陥りやす

い危うさがいくつもある。一つには、何かを空間属性であるかの如く示唆することで、思考停止が可能になることがある。例えば、筆者は本稿の事例を都市のせいだと考えることで、正直なところ少し気が楽になる自分を見出す。個々の努力不足や、他の親族や近隣の冷たさという個人単位の責任ではないところに原因を探したい、という欲求があり、都市なるものに帰責することで「誰も悪意はなく、誰のせいでもなくそうになってしまう」と合理化することが可能になる。「“怪物的な巨大都市”のせいにする方がよほど楽」(Castells [1975=1983:8])なのである。このような思考停止を可能にすることは、空間というマテリアルな存在—物質であるがために人為ではどうにもならないと考えることを可能にする—と結びつけられている語彙の大きな機能といえよう。硬直的な状況に対して、それ以上の理由を探さずにそこで思考を切断できる効果が、筆者を含めた非当事者がこの事例を都市的な問題と理解したくなる余地を生み出している可能性がある。

また、それと関連するが、空間の影響を考えることは、その空間にいる者が十把ひとからげに空間の影響下にあるように描いてしまう場合がある。しかし、疎外的な「都市」イメージが大都市の居住者に共感されなくなっていたように、途中の過程をショートカットすることは、かえって実感を掬い取ることから離れていってしまうことになる。

単に都市に帰責することで楽になるということではなく、問題を私領域へ囲い込まずに、専門処理サービスの浸透や、親族や友人が空間的に分散した生活というような、状況を条件づけているより広い現象に関連付けて考える糸口として、都市という元々空間の含意を持っている想像力が機能していくことを期待する。そのた

めの素材を提示していくこと、そして今回は提起に留まっている〈都市〉への志向について一層明確化していくことを、今後の課題としたい。

註

- (1) 本稿では、市部と言われるような地理的範囲としての都市を“都市域”、概念としての都市を括弧なしの“都市”、筆者が設定した、空間的距離からの自由への志向を“〈都市〉”、人々の主観の中のクリシェ化した都市を括弧つきの“[都市]”と表記する(引用部分をのぞく)。
- (2) 何に都市性を見出すかを積極的に提起する姿勢において先行する研究として、盛り場から都市の感覚にアプローチしようとした吉見 [1987] や、群衆に都市をリアルに感じる瞬間を見出した中筋 [1996] などを挙げたい。場面としては第三空間的なものを扱うこれらの研究は本稿と一見文脈がずれるが、都市を何らかの一貫した状態として定義しようとするのではなく、ある形の関係の質が見える瞬間を都市として取り出そうという姿勢は共通する。
- (3) 都市とあえて呼ぶことで何かが見えやすくなるということが、これまでの都市という語彙の使われ方に関連しつつ新しい要素を付け加えることだとして。ならば、空間性や人口集中に関わる志向であり、またこれまでの都市社会学が都市的な要素として積み上げてきたものと関わるこの志向は、これまでの「都市」という語彙との連続性のうちにあるし、また空間性に関わる要素によって硬直化しているような問題を照射する力があれば、新しい要素を付け加えることになるだろう。
- (4) 倉沢 [1998] では「専門処理システム」という用語が使われているが、本稿では個々のサービスの利用場面を問題にしておき、システムよりもサービスがなじむと判断したため、「専門処理サービ

ス」で統一している。

- (5) 2001年10月から開始し、本稿執筆時点も調査継続中。ホームの家族会の集まりに出席してくる人に聞き取りを依頼している。主に親の発病・発症時からホーム入居までの介護の状況を尋ねている。執筆時点まで、7名に対して、それぞれ1時間から2時間半の聞き取りを終えている。
- (6) “都市”と“都会”という語の差異は分析の必要があるが、社会学では“都市”が使用されることがほとんどであるため、本稿では、実際の表現を抜き出した場合以外は、“都会”という表現も含めるとみなして“都市”という語を使用していく。
- (7) いずれも2001年中の朝日新聞投書欄「声」から

抜き出した表現。

- (8) Louis Wirthのこと。Wirth [1938=1965] は、都市では親密な関係が減少するという議論の代表として、疎外論的と分類されることが多い。
- (9) 例えば内藤 [1997]。
- (10) 老人クラブや地域でのデイサービスなどの存在は、出て行くことが好きな親の場合はプラスに評価されることがある。ただ、それらは隣人の支援というよりも、専門処理サービスの一種といえる。
- (11) 不満を述べるとしたら、福祉関連の制度に対してになる。例えば、支援情報の集めにくさ、入所施設の不足、介護者の交通費が介護保険では支給されないことなどである。

文献

- Castells, Manuel 1975 "Urban Sociology and Urban Politics-From a Critique to New Trends of Research", *Comparative Urban Research*, Vol.3 No.1 = 1983奥田道大・広田康生編訳, 「都市社会学と都市政治——最近の研究動向への一批判」, 『都市の理論のために』:3-15, 多賀出版。
- Fischer, Claude S. 1984 *The Urban Experience*, Harcourt Brace & Co. = 1996 松本康・前田尚子訳, 『都市的体験』, 未来社。
- 古沢 照幸・加藤 義明 1989 「東京と地方在住者の「東京イメージ」の比較的研究」, 『総合都市研究』37:121-133.
- 金子 勇 1997 「都市的生活様式と都市高齢化の社会学」, 『日本都市社会学会年報』15:3-21.
- 倉沢 進 1977 「都市的生活様式論序説」, 磯村英一 (ed.) 『現代都市の社会学』:19-29, 鹿島出版会。
—— 1998 『コミュニティ論』, 放送大学教育振興会。
- 松本 康 1995 「現代都市の変容とコミュニティ、ネットワーク」, 松本康 (ed.) 『21世紀の都市社会学 第1巻:増殖するネットワーク』:1-90, 勁草書房。
- 内藤 辰美 1997 「福祉社会の形成と都市社会学」, 『日本都市社会学会年報』15:23-38.
- 中筋 直哉 1996 「群衆の居場所——近代都市空間の形成と民衆の「都市の体験」」, 吉見俊哉 (ed.) 『21世紀の都市社会学 第4巻:都市の空間 都市の身体』:57-89, 勁草書房。
- 西野 淑美 2000 「「都市」を見ることと感ずること」, 『相関社会科学』10:68-83.
- Simmel, Georg 1908 *Soziologie. Untersuchungen über die Formen der Vergesellschaftung*. Duncker & Humblot, Berlin = 1994 居安正訳, 『社会学 上・下』白水社。
- 鈴木 栄太郎 1957 『都市社会学原理』, 有斐閣。
- 高橋 勇悦 1975 「都市化社会の社会学——都市社会学の危機と再生」, 『社会学評論』25 (4) :86-101.
- Tönnies, Ferdinand 1887 *Gemeinschaft und Gesellschaft: Grundbegriffe der reinen Soziologie*. = 1957 杉之原寿一訳, 『ゲ

マインシャフトとゲゼルシャフト：純粹社会学の基本概念 上・下』（岩波文庫），岩波書店。

Wellman, Barry 1979 "The Community Question", *American Journal of Sociology*, 84:1201-31.

Wirth, Louis 1938 "Urbanism as a Way of Life", *American Journal of Sociology*, 44:3-24. = 1965 高橋勇悦訳，「生活様式としてのアーバンイズム」，鈴木広（ed.）『都市化の社会学』：127-147，誠信書房。

安田 三郎 1954 「都市社会と都会人」，磯村英一（ed.）『都市』：97-146，有斐閣。

吉見 俊哉 1987 『都市のドラマトゥルギー』，弘文堂。

Zijderveld, Anton C. 1979 *On Clichés: The Superseding of Meaning by Function in Modernity*, London & Boston: Routledge&Kegan Paul.=1986 那須壽訳，『クリーシェ：意味と機能の相克』，筑摩書房。

※本論文は文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。

(にし の よしみ、東京大学大学院、nyoshimi@nifty.com)

Spatially Dispersed Lifestyle and Imaginations of the City

Through Three Cases of Family Nursing Care

NISHINO, Yoshimi

University of Tokyo

nyoshimi@nifty.com

This paper examines the possibility that the spatiality of our lifestyle become visible through the very term 'city', although the instability of its definition has been continuously discussed, and that the term 'city' gives expression to our tendency not to relate the quality and quantity of relationship with spatial distance. Through examining three families that tried to realize family nursing care with each child's household spatially dispersed, their orientation toward community-liberated lifestyle is shown. The difficulty for the interviewees to realize the influence of spatiality to the condition of their families is also examined in relation to the fact that the 'city' is less verbalized nowadays.